

To 不定詞と動名詞の選択に関する研究

人文社会科学部文化創生課程多文化共生コース

18H1077 長谷川加奈

本論文では、動詞の目的語としての不定詞と動名詞の選択に関して、文中で使用される際の微妙なニュアンスや用法の違いを、それぞれの動詞に沿って、認知的側面から論じたものである。また、動詞の目的語として選択された不定詞と動名詞はほぼ同じ意味を表すという認識が学校英文法を通じて浸透したが故に、主動詞がいずれかあるいは両方を目的語に選択するのかといった文法的判断が、非英語母語話者にとって困難なものとなっている現状を踏まえ、両者を使い分けるための原則的な区別を提示する。

第1章では、主に先行研究の紹介及びそれら一部に対する問題点をまとめた。Bolinger (1968) や Duffley (1992)、石黒 (監修) (1999) などの多くの研究者が、不定詞を未来指向的なもの、動名詞を過去指向的なものとして捉えているが、現在指向はどちらが含むのかあるいはどちらにも含まれないのかを一つの論点として取り上げた。この点に関しては、大津 (2004) の今していることについて述べる進行形と同じ-ing 形 (現在分詞) を用いていることを根拠に、現在のことに言及できるという主張を支持した。ただし、動名詞が現在分詞の影響を受け、現在指向となるのは理解できるが、同様の影響で過去指向もとることができるという点について説明不十分な問題点であることを指摘した。また、他の問題点としては、大西・マクベイ (2008) による動名詞の「イキイキ感」が挙げられる。彼らは行為が着手されている映像が脳内で流れていること＝「イキイキ感」と見なしているが、この「イキイキ感」が意味する内容をよく理解することができない。

第2章において、第1章の先行研究の問題点を踏まえ、(1)の仮説に基づく分析を提案した。

(1) 動名詞は主動詞に対して出来事に着手済みであること (また、それに近い状況) を示し、不定詞は主動詞に対して出来事に未着手であること (また、それに近い状況) を示す。

(1)の妥当性を、①目的語に動名詞のみを選択する動詞、②目的語に不定詞のみを選択する動詞、③目的語に動名詞・不定詞の両者を選択し、意味があまり変わらない動詞、④目的語に動名詞・不定詞の両者を選択し、選択によって意味が異なる動詞の4つに区分して、本稿の提案に基づく分析を行った。

まず、目的語に動名詞のみを選択する動詞に関する分析を示す。

(2) a. I enjoy *talking* with you.

- b. He avoided *giving* a definite answer.
- c. We practice *hitting* the ball.

(2a) は動名詞節が現在起きている出来事であると考えられるため、仮説 (1) に合致する。
(2b) は現実的にははっきりとした返事をしていない(動名詞節で表現された行動はまだ起こってはいない)が、行動選択の時点で彼自身の想像上、行為(出来事)に着手した、言い換えれば、はっきりとした返事をするという、まだ起こりえていない出来事を想像する仮想の空間において、行為(出来事)に着手している。したがって、動名詞節は現実の範囲内ではまだ着手していない未来の時点であるが「出来事に着手している」と解釈することができるため、仮説に合致すると主張する。また、これは大西・マクベイ (2008) のイキイキ感の解釈を改める本稿での見解だが、実際には未来に起こる (まだ起きていない) 想像の地点においてその行為に実際に着手していることを示していると分析することができることを論じた。換言すれば、現在や過去といった時制の中ではなく、未来においても、仮想の空間において、その時点にワープして行為に着手していれば、動名詞を選択できるという主張である。(第2章に含めた方がよい。) (2c) はボールを打つ練習していることになるため、前述した (2b) の動詞 avoid と同様の解釈ができる。

次に、目的語に不定詞のみを選択する動詞に関する分析を示す。

- (3) a. He wants *to buy* nice gifts for his children.
- b. We decided *to rewrite* the rule book.

(3a)において、彼の願望を示す to 不定詞節はまだ着手していない未実現のことを表していることから、仮説 (1) に合致する。(3b)は過去の話をしているが、「決めた」時点で「ルールブックを書き直すこと」はまだ実現しておらず、着手していないことから、仮説 (1) に合致する。

次に、目的語に動名詞・不定詞の両者を選択し、意味があまり変わらない動詞に関する分析を示す。

- (4) a. I like *to drink* coffee.
- b. I like *drinking* coffee.
- (5) a. We intend *to investigate* the accident.
- b. We intend *investigating* the accident.

(4a) は、江藤(2015)の解釈によると、「『コーヒーが飲みたい』『コーヒーをいただきます』と言う場合に適切な表現」であることから、未来的な含みを持っている。一方で、(4b) に対して、江藤 (2015) は「習慣的な事実を表す動名詞を用いており、『私はコーヒ

ーを飲むのが好きだ』や『コーヒーを飲むのを楽しんでいる』』と訳すことが可能であるとしている。この解釈を参考にすれば、動詞 like の不定詞と動名詞の用法は具体的なニュアンスが異なることが確認できる。不定詞の用法は未来的な含みから行為に未着手であり、動名詞は過去も含め現在も習慣的に候に着手している点で仮説と一致する。（仮説との関連は？）また、動詞 like のような、平生の好き嫌いを表現する際に動名詞が好まれる理由として、江川（1991）は「動名詞はすでに経験ずみの事柄または現在経験中の事柄を表すから」としている。（5）におけるように、動詞 intend は不定詞と動名詞の両方を目的語に選択できる動詞だが、実際には使用頻度に偏りがある。その証拠として、COCA（Corpus of Contemporary American English）において、動詞 intend を用いた例文を 100 抜粋して検証した。年代は 1990 年～2018 年で、テレビ番組や雑誌、学術記事など様々である。全 100 の例文のうち、目的語に不定詞を選択していたものが 87、動名詞を選択していたものが 0（残りの 13 はどちらでもない）という結果であった。このことから、動詞 intend は不定詞と動名詞の両方を目的語に選択できる動詞であるものの、実際には不定詞が高い頻度で選択されやすいことが分かる。その根拠は、動詞 intend の意味にあり、「意図している」時点に対して、実際に行動を起こす時点はまだ実現していない。したがって、仮説より、不定詞は動詞が表す出来事に未着手（あるいはそのような状況に近い）であることを示すことから、動詞 intend は不定詞の方を高頻度で選択すると推測される。

最後に、目的語に動名詞・不定詞の両者を選択し、選択によって意味が異なる動詞に関する分析を示す。

- (6) a. She remembers *to post* the letter.
b. She remembers *posting* the letter.
- (7) a. I regret *to say* I cannot come.
b. I regret *saying* that I could not come.

(6a) において、「忘れずに～すると考えている」時点に対して「投函する」時点はまだ実現していない一方で、(6b) は、過去に投函した事実を述べている。したがって、(6a) と (6b) のどちらも仮説に合致する。(7a) に関しては「相手の元へ伺う」ことができないことを謝罪していることから未実現のことを表し、(7b) は「後悔している」時点に対して「伺えないと言った」ことは既に起こったことで着手済みであることから、仮説に合致する。

先行研究の問題点や筆者の分析過程において、動名詞は仮に未来の出来事に言及していても、まだ起こりえないその仮想の空間にワープして出来事に着手していると解釈されると述べた。この解釈と出来事に未着手である不定詞の使い分けがさらに一步踏み込んだ本稿での主張である。(2b) で触れた動詞 avoid は動名詞を目的語に選択し、前者の解釈ができる動詞である。

(8) I'm on a diet. So, I avoid eating sweets.

(8) はダイエット中という期間の中、話者がスイーツの摂取を避けていることを表している。痩せた自分というなりたい自分自身になるために、ダイエット中繰り返し「甘い物を食べない」という特定の行動を起こしていることから、「習慣」という要素が含意されていると言える。次に、不定詞のみを選択する動詞 want を使った例文 (9) を考えてみることにする。

(9) I always want to work smiling.¹

(9) のみからは過去に同様の願望を持っていたかは不明で、「習慣」の要素を想起させるとは断言できない。(8)と(9)の比較から、動名詞のみを選択できる動詞は「習慣」という要素が含意されている一方で、不定詞のみを選択できる動詞はその文のみでは「習慣」の要素を想起させることが不可能であるということを明らかにした。両者の違いとしては、動名詞側は動作動詞で、不定詞側は状態動詞であることである。よって、(10) のようにまとめられる。

(10)

動作動詞：習慣読みが可能(過去に行っていることを意味)→動名詞選択

状態動詞：習慣読みが不可能(過去に引き続き今後も継続されるかは不明)→不定詞選択

本稿の結論として、動名詞と不定詞の区別は出来事に着手済みか未着手かという点にあり、動名詞の未来にワープして着手済みと不定詞の未着手の区別は「動作動詞か状態動詞かどうか」という点で判別できることを指摘した。

主要参考文献

Bolinger, D. 1968. "Entailment and the meaning of structures." *Glossa* 2(2), pp. 119–127.

Declerck, R. (安井稔訳) (1994) 『現代英文法総論』 東京：開拓社.

Duffley, P. J. 1992. *The English infinitive*. New York: Longman.

石黒昭博 (監修) (1999) 『高校総合英語 Forest (フォレスト)』 東京：桐原書店.

¹<https://context.reverso.net/%E7%BF%BB%E8%A8%B3/%E8%8B%B1%E8%AA%9E-%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E/always+want+to> (最終閲覧日 2022 年 3 月 1 日)

江川泰一郎 (1960) 「動詞の目的語としての動名詞と不定詞」 『日本英文学学会英文学研究 36 卷 2 号』 pp. 303-318.

江川泰一郎 (1991) 『英文法解説 改訂 3 版』 金子書房.

江藤裕之 (2015) 『英文法のエッセンス』 大修館書店.

大津由紀雄 (2004) 『英文法の疑問恥ずかしくてずっと聞けなかったこと』 NHK 出版.

大西泰斗・ポール・マクベイ (2008) 『NHK 新 3 か月トピック英会話ハートで感じる英語塾
～英語の 5 原則編～』 NHK 出版.